

<牧会ミニ通信>No.23 2020.10.4

確か真夏の礼拝でした。アメリカ在住のクリスチャンの娘さんとお母さんが礼拝にお見えになりました。山手のダウン・タウン地区にある教会としては、似つかわしくないご婦人でした。最初は一見さんと思われました。ところが、何と毎週お見えになるではありませんか。しかも、礼拝姿勢を崩すことなく、真剣に正面を見据えて礼拝しておられます。半年後、S姉妹は洗礼を申し出られました。

洗礼準備会は5回程度なのですが、乞われるまま15・6回にもなりました。全部カセットに録音していましたから、自宅でも、運転中でも繰り返し聞き返していた、といいます。

何でも、栃木から18歳で横浜のS家に嫁いで、64歳の今日にいたるまで、心の底から笑った記憶がないと意外なことを打ち明けられました。しかも、普段ではありえない驚くべき家庭内の事情を話してくださいました。自宅に招かれました。立派な邸宅を前に、逡巡したわたしは、勝手口の呼び鈴を押したのです。笑いながら出てきた彼女は、「あら先生、表玄関にお回りください」と言うではありませんか。玄関が二つあります。わたしは賓客用の玄関に通されました。

ご主人は、先代の二代目です。横浜の港湾事業に携わってきた社長でした。社員には「仏のSさん」と慕われ、人望高いご主人であったといいます。しかし、自宅に帰れば、わがままな放題のご亭主でした。ところが、ご主人は若いころから「内村鑑三」を愛読していたといいます。その彼が緊急入院しました。見舞いに伺った時です、「あなた、牧師さんがいらしたわよ、神さまを信じる時です」と、何はばかることなく、ご主人の耳元で叫び始めたのです。わたしは、深い感動を覚えました。ご主人が亡くなられた時、乞われるまま教会で葬儀を行いました。「御言はなんじに近し、なんじの口にあり、汝の心にありと。これ我らが宣ぶる信仰の言なり。即ち、なんじ口にてイエスを主と言ひあらはし、心にて神の之を死人の中より甦へらせ給ひしことを信ぜば、救はるべし（文語体）（ロマ10：8-9）。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次